

親鸞の光明思想に関する研究―浄土教理史的背景を中心に― 要旨

安部 弘得

目次

序論

第一節 本研究の目的

第二節 先行研究の問題点と本研究の方法

第一項 伝統的光明解釈

第二項 近年の研究動向

第三節 本論の構成

第一章 大乘仏教の光明思想とその淵源

はじめに

第一節 光明思想の淵源

第一項 阿弥陀仏の起源

第二項 原始經典の光明思想

第二節 大乘仏教の光明思想

第一項 大乘經典の光明思想

第二項 『大智度論』の光明解釈

第三節 仏教美術の観点から見る光明

第一項 インドにおける「蓮華の創造性」

第二項 ガンダーラ浮彫と「大光明の神変」

おわりに

第二章 浄土經典の光明思想

はじめに

第一節 『大阿弥陀經』の光明思想

第一項 頂中の光明・智慧・威神・寿命

第二項 見光の利益

第三項 「光明名」の解釈

第二節 『無量寿經』の光明思想

第一項 清浄・威神・利益

第二項 光明と說法

第三項 触光・遇光・見光・聞光

第三節 『觀經』の光明思想

第一項 光の変化性

第二項 光の説法

第三項 光中の化仏

おわりに

第三章 曇鸞・善導・源信・法然の光明思想

はじめに

第一節 曇鸞の光明思想

第一項 光明と智慧

第二項 「国土の名字」と破闇満願

第三項 曇鸞における「応化身の光」

第二節 善導の光明思想

第一項 『観経』からの影響

第二項 光明と本願

第三項 善導の心光観

第三節 源信の光明思想

第一項 『観仏経』の光明思想

第二項 『阿弥陀仏白毫観』所説の白毫光

第三項 『往生要集』別相観における化仏

第四項 『往生要集』総相観・雑略観における化仏

第四節 法然の光明思想

第一項 基本的な光明理解

第二項 『逆修説法』所説の白毫光

第三項 法然の化仏観

おわりに

第四章 親鸞の光明思想

はじめに

第一節 光明・名号・涅槃

第一項 『無量寿経』引文に見る光明と名号

第二項 涅槃としての真仏土

第二節 光明と二種法身説

第一項 智慧のかたち

第二項 親鸞における「応化身の光」

第三節 親鸞の心光観

第一項 阿弥陀仏の心

第二項 親鸞の聖衆観

第四節 隆寛・明恵との比較

第一項 隆寛の光明思想

第二項 隆寛の至誠心釈

第三項 明恵の心光観

おわりに

第五章 親鸞没後の光明解釈―「調熟の光明」の成立過程をめぐって―

はじめに

第一節 覚如・存覚・蓮如の光明解釈

第一項 覚如の光明解釈

第二項 存覚の光明解釈

第三項 蓮如の光明解釈

第二節 江戸宗学の光明解釈

第一項 光号因縁釈

第二項 五重義相

第三項 身心二光の区別

おわりに

結論

第一節 各章の概要

第二節 本研究の意義と今後に向けての課題

初出一覧

参考文献一覧

図版一覧

別表 A 『往生要集』別相観と『観仏経』の対照表

序論

本研究は、親鸞における光明思想の独自性を浄土教理史的背景から明らかにしようとするものである。

親鸞は、『教行証文類』『真仏土文類』において阿弥陀仏を「不可思議光如来」とし、その浄土を「無量光明土」と規定している。したがって、親鸞にとって光明は、阿弥陀仏・浄土と並んで重要な概念と見なされている。

そのため、親鸞没後の浄土真宗（以下、真宗）、特に本願寺派の江戸宗学において、光明研究は盛んにおこなわれた。その成果は次第に洗練され、現在において伝統的解釈として定着した部分もある。そういった状況にあつて、親鸞の光明思想はすでに論じ尽くされた観もある。

しかし一方で、普賢大圓は次のように述べる。「光明とは一体何であるか。わかったやうでわからないのが、如来の光明である」と。氏がそのように吐露する理由は、阿弥陀仏の「仏徳」に求められる。すなわち、光明は「仏徳」を指示しながらも、その仏徳が「無限絶対」であるがゆえに「象徴しつつ象徴し切れない悩みが露呈」されるという。また、普賢は「仏の光明には、多含の意味がある」とも述べる。ここには、光明研究において未知なる領域のあることが示唆されている。

他方、光明を多義的に理解するのではなく、逆にその意味を限定する意見もある。大江淳誠は「行文類」所説の光号因縁（両重因縁）を解説する中で、「光明・名号は同じもの」と述べ、また「光明と名号を二に分ける意味はない」と断定している。

仮に普賢と大江両氏の意見が正しいとするならば、親鸞は光明に多くの意味を含ませ、且つ光明を名号と見なしていたことになる。

このような親鸞における光明思想の独自性を浄土教理史的背景を踏まえることによって明らかにしようとするのが、本研究の目的である。

もちろん、これまで浄土教理史の方向から親鸞の光明思想が論じられてこなかったわけではない。少なからず研究蓄積（特に本願寺派に多い）も存する。しかし、先行研究では、真宗七祖のうち、とりわけ曇鸞の光明思想に注目が集まっており、他の祖師に関しては等閑視されているか、あるいは研究されていたとしても概説的である。

そのような中で、真宗大谷派に属する加来雄之の意見は示唆に富む。氏は親鸞の仏身・仏土観には真仏土と化身土との二重性があるという文脈の中で、「化身とは真身が念仏衆生を撰取不捨する一々の光明の具象」と述べ、「真仏土の「仏」は「不可思議光如来」であるが、その真仏は無数の「化仏」の光明として衆生を利益する」といった見解を示している。加来が主題にしているのは、親鸞の仏身・仏土観であつて光明ではないが、親鸞の光明思想に「化身」や「化仏」が関わっている可能性は十分に考えられる。その点に関して、曇鸞も含めて教理史面から検証し直す必要がある。

また、先行研究では、親鸞の光明思想の特徴を論じる際に「心光」が取り上げられる傾向にある。そこでは、親鸞の心光観が善導のそれと同じという前提のもとに論が進められ

ている。親鸞の心光観の独自性を浮き彫りにするためにも、善導の心光観を改めて究明する必要もあろう。

このような問題を解決するために、本研究では主に曇鸞・善導・源信・法然の光明思想を取り上げる。七祖の中から四師を選んだ積極的な理由は、それぞれの著述（筆記録も含む）において光明と化仏・応化身が強く結び付いている点、あるいは親鸞の光明思想との関連性を考慮したからである。龍樹・天親・道綽については親鸞と全く関わらないわけではないが、今回取り上げる祖師との重複の関係、または優先順位の観点から本研究では取り上げない。また、先の四師の光明思想だけでなく、原始仏教・大乘仏教・浄土仏教における光明思想、さらには親鸞没後の教学史的展開についても目を配りたい。

第一章 大乘仏教の光明思想とその淵源

第一章では、浄土仏教の光明思想の前提を確認するために、原始仏教と大乘仏教の光明思想について論じた。

第一節では、仏教における光明思想の淵源を探るために、阿弥陀仏の起源を取り上げた。それについては現在のところ定説はないものの、一応のところ、①外来起源説、②インド宗教起源説、③仏教内起源説に大別できる。ここで主に注目したのは、③の立場の一つである原始仏教起源説である。この説は、原始經典に説かれる光明思想に着目したものである。『相应部』『増支部』によれば、釈尊（仏）は光明で表徴されており、仏は見えないもの（真理）を可視化し、それゆえに「智慧の光」ともいわれる。また、仏の放つ光明は奇瑞相・威神・神変とも捉えられている。

第二節では、大乘諸經典と『大智度論』における光明の用例を確認し、大乘仏教の光明思想が、原始仏教に比してどのように発展したのかを考察した。大乘經典では、仏の放光が見えない場所を照らし出したり、説法の前兆に捉えられたり、衆生に対してさとりや具體的な利益を与えると説かれている。また、光明から多数の化仏が示現して、それらが説法するといった説示もある。そういった光明の様相ないし用きは、原始經典同様に奇瑞相・威神・神変と捉えられる。また、『大智度論』の場合も光を説法（闡法）・奇瑞相・神力に関連させており、大乘經典と通底する部分が多い。ただし、具体的な内容を見ると、光と仏力の関係や化仏の説明、光明の分類方法などにおいて独自の解釈がなされている。

第三節では、少し視点を変えて仏教美術の側から光明を論じた。すなわち、紀元前二世紀〜紀元後五世紀後半におけるインドあるいはガンダーラの仏教美術を通して、当該時代の人々が光にどのようなイメージをもっていたのかを考察した。バールフット欄楯の蓮華意匠およびサルナート浮彫は、水と蓮華が連動して誕生・生成・増殖の様相をあらわしており、そのイメージが光明にも託されている可能性を示した。この可能性については、ガンダーラ浮彫における発出タイプを用いて肯定した。当該浮彫には、光と蓮華が連動して複数の化仏を生み出し、それが放射状に発出される様相が表現されている。一方、蓮池

タイプの浮彫は、阿弥陀仏の浄土が娑婆世界に顕現する様相をモチーフにしている。したがって、光明には誕生・生成・増殖、それから可視化（顕現化）のイメージが託されていることになる。

以上のように第一章では、光明には可視化・瑞相・威神・神変・説法・化仏・誕生・生成・増殖など、容易にカテゴライズできない多義的特性があることを明らかにした。

第二章 浄土經典の光明思想

第二章では、『大阿弥陀經』『無量寿經』『觀經』を用いて、前章で示した光の多義的特性が、浄土經典の上にどのようなにあらわれているかを考察した。

『大阿弥陀經』に関しては、「頂中の光明」が多用されている点、智慧・威神が光明と同義と見なされている点（ただし、威神に関しては例外もある）、寿命極長が光明無量の根拠とされている点を指摘した。また、見光の利益については、解脱の他に①慈心・歓喜、②作善、③見仏国土、④奇蹟的利益の四種類があることを確認した。また、阿弥陀仏の「光明名」の解釈に関しては、「阿弥陀仏の光明を称讃する声」とする説を支持した。ただし、『大阿弥陀經』全体としては光明と名号が利益面で同義になると結論した。

『無量寿經』の光明思想については、『大阿弥陀經』に比して、浄土の莊嚴相に関する光の用例が増加していること、清浄光が強調されること、光明と威神の関係がより密接になっていることを示した。また、利益面については「靈山現土」の説示内容から、『大阿弥陀經』と同様に、光が見えないもの（阿弥陀仏）を可視化する用きを有していることを確認した。ただし、当該文では『大阿弥陀經』のような奇蹟的利益は説かれていなかった。次に、奇瑞相と浄土の莊嚴相に関する文を通して、光明が説法と結び付いている点を示した。そして、「触光」「遇光」「見光」「聞光」といった動詞のユレが、対機説法と関連していることを指摘した。

『觀經』に関しては、その光明思想の特徴を「光の変化性」「光の説法」「光中の化仏」にグループ分けして論を進めた。「光の変化性」とは、浄土の光が莊嚴相に変化して仏事を施作・映写すること、または光が宝鳥に変化して念三宝を讃ずることである。「光の説法」とは、光から示現した莊嚴相または光そのものが様々な妙法を説くことである。「光中の化仏」とは、阿弥陀仏の円光や觀音菩薩の毫光の中に存在する無数の化仏を指す。

以上の三經に共通していることは、光の多様性が説かれていることである。『大阿弥陀經』では見光に関して多様な利益が示されている。『無量寿經』の場合、衆生に随って説法（光）の形態が様々に変わっている。『觀經』では光自体が莊嚴相として多様に変化している。

特に、『無量寿經』『觀經』において説法（光）の形態あるいは光自体が変化することは、曇鸞・善導・源信・法然の光明思想にも確認できる。

第三章 曇鸞・善導・源信・法然の光明思想

第三章では前二章を踏まえ、光の多様性が曇鸞・善導・源信・法然においてどのように展開したのかを論じた。

曇鸞の光明思想に関しては、『論註』を用いて光明と智慧の関係、光明と名号の関係について考察した。前者については、智慧の分釈および広略相入の論理を用いて、智慧が二種法身の構造を有している点を確認し、それが光明にも当てはまることを指摘した。つまり、光明と智慧には二種法身（法性法身・方便法身）の構造が与えられている。「仏の光明は是れ智慧の相なり」とか「光明は慧に非ずして能く慧の用を為す」といった文は、法性法身を背景にした方便法身の用きを示している。

また、光明と名号の関係については、曇鸞の基本的な名号論（名即法・破闇満願）を確認した上で、「仏事」に注目して考察をおこなった。「安楽国土の光明」と「国土の名字」は共に仏事をなす点で同義となる。そして、その仏事とは破闇と満願を指している。

さらに、浄土の菩薩が種々に衆生済度をおこなうことも「仏事」と呼ばれ、その様相は「応化身の光」とも換言される。「応化身の光」による自由自在な衆生済度（仏事）は、二種法身の論理によって裏付けられている。

善導の光明思想に関しては、五部九巻を見渡しながら『観経』と『無量寿経』からの影響を確認し、つづいて善導自身の心光観について論じた。『観経』については、第二章第三節に則って「光の変化性」「光の說法」「光中の化仏」のグループ分けによって論を進めた。その結果、善導の著述に『観経』の光明思想がほぼそのまま踏襲されていることが確認できた。『無量寿経』に関しては、光明と本願の関係に注目した。文によって両者の重なり具合には異なりがあるものの、総じて善導は本願を根拠にして光明による衆生済度を語る。この点は法然・親鸞にも引き継がれることになる。

また、善導の心光観については、『観念法門』の文脈を確認した上で、同書が参考になっている『観仏経』を用いて検討をおこなった。結論としては、仏心は仏の「心臓」と「慈悲心」の両面を有しており、単純に身心どちらか一方に限定できない。すなわち、心臓の光の中には化仏を含む無量の聖衆が存し、その聖衆たちが念仏者を影護する用きが慈悲心ないし心光摂護と呼ばれる。

源信に関しては、『阿弥陀仏白毫観』と『往生要集』を用いてその光明思想を論じた。『阿弥陀仏白毫観』では『華嚴経』『観仏経』に依って、白毫光が衆生に応じて変現し説法すること（現身説法）が述べられている。また、『往生要集』別相観・総相観・雑略観では、『観仏経』あるいは『観経』の影響を受けながら、化仏の存在とその説法が重要視されている。すなわち、別相観では「光中の化仏」が具体的に様々な教法を説くと述べられ、総相観と雑略観では化仏が事観と理観を繋ぐ要素の一つとして捉えられている。

法然に関しては、まずはその基本的な光明理解を確認した。法然は「偏依善導一師」の立場から、第十八願の本願を光明摂取の根拠とし、ひいては名号の中に光明の功德を摂め

ている。また、十二光（実際には六光）や常光・神通光、身光・心光についても言及しているが、総じて法然は阿弥陀仏の光明を『観経』所説の身光・摂取光と解している。

他方、法然の光明思想には源信からの影響も指摘できる。『逆修説法』では、『阿弥陀仏白毫観』の説示に則って白毫光による現身説法が語られている。ただし、両書の内容には一致しない部分もある。中でも法然は現身説法の「説法」に言及していない。その理由は、選択本願の立場に基づく法然の名号論にあると考えられる。名号には説法に限らずあらゆる功德が含まれていると理解する法然にとって、強調すべきは名号（称名念仏）であって、応化身によって説かれる様々な教法ではなかったであろう。また、法然は化仏の役割として、「本願（称名念仏）の讃歎」および「摂取と来迎」を重要視している。前者に関しては先述したように選択本願の立場、後者については平生と臨終にとらわれない法然独自の来迎観が関与していると考えられる。

第四章 親鸞の光明思想

第四章では、前三章を踏まえて親鸞の光明思想がどのような独自性を発揮したのかを論じた。

第一節では、『教行証文類』における「真仏土文類」および「行文類」の『無量寿経』引文を通して、光明と名号の関係について検討した。親鸞において光明と名号は「威神」を媒介にして同義と見なされている。そして、「威神」は「本願力」と換言されていることから、光明・名号が本願力の点で同義に捉えられていることを指摘した。また、同節では「真仏土文類」所引の『涅槃経』における所謂「読み替え」を通して、親鸞の涅槃観を考察した。親鸞にとって「無量光明土」と表象される涅槃は、無相であると同時に有相として積極的に衆生に関わってくる概念と受け止められている。そして、衆生はその涅槃を見守るのではなく、名号として聞見する。つまり、親鸞は光明を名号として捉え、それを聞くことによって受容している。

第二節では、親鸞における二種法身説を確認した上で、「智慧のかたち」と「応化身の光」について考察した。親鸞は『論註』を参考にして、阿弥陀仏・智慧・光明の三者に二種法身の構造を与えている。『唯信鈔文意』所説の「智慧のかたち」は、法性法身を背景にした方便法身の用きを示している。また、「智慧のかたち」は阿弥陀仏（報身）に限定されることなく、「応化身の光」として多様に展開する。すなわち、二種法身の構造を与えられた「応化身の光」は、名号の伝達者として自由自在に衆生済度することが可能となる。この点において、親鸞が积尊・法然・還相の菩薩を光によって表象した意義を見出すことができる。

第三節では、親鸞の心光観について検討した。親鸞は『一念多念文意』において心光を「無碍光仏の御ころ」と解し、それを真実心・清浄心ひいては真実（さと）と捉えて

いる。そして、真実は名号として廻向される。親鸞が心光を「光」ではなく「心」の問題とするのは、衆生の無明煩惱に対照（対応）させるためと考えられる。

第四節では、親鸞と同時代を生きた隆寛と明恵の光明思想について論じた。ここでは、前節を踏まえて、親鸞の心光観との比較に主眼を置いて、主に隆寛の至誠心積と明恵の心光観を取り上げた。隆寛は心光の語を使用しないものの、真実心（至誠心）を阿弥陀仏の側に置くことは親鸞と共通する。しかし、隆寛が真実心を衆生の側に引き寄せる場合があるのに対して、親鸞は衆生の側にそれを認めず、あくまで真実心は名号として廻向されると解する。その意味では、親鸞の方が隆寛よりも衆生対阿弥陀仏のコントラストが強いといえる。

また、明恵と親鸞の心光観を比較する際は、浄心と清浄心を考察対象とした。明恵は心光の撰不撰は衆生の清浄なる念心（浄心）の有無によって決まると理解している。対して、親鸞はもとより衆生には清浄心を持ち得ないとし、心光を阿弥陀仏の清浄心とする。明恵が身心二光の区別にこだわるのは、心光を「光」の問題と解するからである。一方、親鸞がその区別に言及しないのは、心光を「心」の問題ひいては真実（さとり）そのものと捉えているからである。したがって、同じ「心光」の語を使用している、その内実は両者の間で異なっている。

第五章 親鸞没後の光明解釈―「調熟の光明」の成立過程をめぐって―

第五章では、親鸞没後の中世および江戸宗学の光明解釈を辿ることで、「調熟の光明」の成立過程を明らかにした。

覚如は、『口伝鈔』『執持鈔』において「光明の縁」という言葉を使用する。「光明の縁」には、光が衆生の無明を徐々に融解して獲信へと育成する意が含まれている。これを承けて、江戸宗学では光号因縁（一部は総序）を積する際に、光明に「照熟」「調熟」「調育」「照育」作用を与える。また、五重義相を積する際には、蓮如と覚如両者の著述の間に生じる矛盾を会通する中で、「調熟」「照育」といった言葉が使用される。

一方、身心二光の区別に関しては、存覚の『六要鈔』の解釈を承けて、心光を他力の益、身光を自力の益に配当する。後者は要門・観門・仮門の行者が蒙る光明と積され、中でも覚音は身光（色光のうちの常光）を「調熟仮門の光明」と呼ぶ。

以上のような光明解釈の流れの中で、「調熟の光明」の宗学内での定着化が進んだと考えられる。

結論

親鸞の光明思想の独自性は、光明の多様性を名号ないし阿弥陀仏へ移行した点にある。すなわち、親鸞以前は光明が多様性を有していた。ここでの多様性とは、説法・教法・利益・化仏・応化身といった意味の多様性である。その光の多様性は、善導・法然の上で次第に限定化され、親鸞の段階で光明が名号と同義となった。

ただし、親鸞は光の多様性を否定したわけではない。親鸞が名号の伝達者を光で表象したり、名号の利益として化仏や菩薩の影護を語るのは、名号の裏に光の多様性が併存している証左である。換言すれば、名号は光明と表裏の関係にあつて、多様に衆生の前にあらわれるといえよう。

最後に本研究の意義を三点述べる。一つ目は、真宗の光明研究に化仏・応化身の観点を導入したことである。親鸞の光明思想は曇鸞に大きく依っている面もあつて、先行研究では『論註』所説の智慧や二種法身の論理が取り上げられる傾向にあつた。すなわち、仏身論の内側で光明を論じていた。この方法では阿弥陀仏の多様な用きを説明できても、なぜ弥陀が光で表象されるのかは不明であつた。一方、本研究では光の多様性に注目して、光明の側から仏身論との共通点を探った。この方法によって、親鸞が二種法身の構造をもつ阿弥陀仏を光で表象する理由を示した。

二つ目は、心光を至心（至誠心）の側面から論じたことである。従来、心光は阿弥陀仏の心ないし慈悲心と捉えられてきた。筆者はそこから一歩進んで、親鸞が心光を阿弥陀仏の真実心・清浄心と解している点に着目した。親鸞は心光を「光」ではなく「心」の問題と捉え、衆生の無明煩惱の心と対照させている。この指摘によって、親鸞が身心二光の区別に言及しない理由を明らかにした。

三つ目は、研究範囲を拡張した上で、浄土仏教の光明思想を論じたことである。先行研究では、とりわけ曇鸞の光明思想に注目が集まっており、他の祖師に関しては等閑視されていたか、あるいは研究されていたとしても概説的であり、相互の連関性が低かった。対して、本研究では大乘經典や浄土經典、さらには仏教美術にも目を配った上で、曇鸞・善導・源信・法然の光明思想を論じた。この方法によって、親鸞に至るまでの四師の間で光の多様性が連綿と語られ続けていたことを示した。

もちろん、本研究において浄土仏教の光明思想を網羅的に論じ尽くしたわけではない。第三章では化仏・応化身と光明との関連に主眼を置いたため、真宗七祖の中でも先の四師を取り上げた。そのため、龍樹・天親・道綽については論じることができなかった。また、第四章では親鸞との比較対象として隆寛を選んだが、他の法然門下の光明思想についても論じるべきであろう。これらの点に関しては、今後の総合的研究に向けての課題としたい。